

障害児の通園施設に、月二度ほどボランティアとして手伝いに行っている。彼らとの短い接触の中で、いつも感じさせられることがある。それは、私のまわりの子どもたちや、私の家の子どもたちの中にないもの、あるいは、彼らが忘れてきたもの、または失ってしまったものを、障害のある子どもたちは宝物のように私に見せてくれる、ということである。

先日、店に買物に行くのについて行ったときのことである。

る。信号が青から赤に変わりそうなとき、私たちボランティアは、無意識に「早く、早く」と叫んでいた。しかし障害児の一人は、「もう一度待ったら、また青になる」といって、ガンとして動こうとしなかった。

身障者に教えられ

藤屋紀子

その日私は家に帰って、ずっとこの光景を思い出し、自分の生活を反省させられ、胸を痛めた。朝起きて、子どもたちを送り出すまでに、私は何度「早く、早く」を連発していただろう。

百の質問に、一秒でも速く答えが出ればその人が勝ち、

というのがまるですばらしくよいことのように思わせるテレビ。電話、電報、電気鉛筆削り、新幹線——早ければ早いほどよい。速いほど満足という世の中で、彼らはまったく違っている。

今の社会のインスタント花

さかりの文明に毒されていない、むしろ、その社会に対してそのありのままの姿で、私たちに何かを教え、何かを訴えようとしているのではないかとさえ考えるようになった。少なくとも、私は彼らについて行こう、ともにありたいと願う。

彼らの一日一日は、あたかも四、五斗も入る石がめに、口まで水を満たすために一生懸命生きている姿のように思われる。

彼らの、この姿のうちに、まったく思いがけずその行く手に、本当に豊かな祝福に満ちた成長ぶりが、目に見えてくる。その時私たちは、みせかけの、表面はきれいに、しかし、背後においては苦しいわりくりをし、だまし合っているような自分たちの生活の中に、今までにないものを見る。あたかも、初めに出された酒よりも、あとに出した酒のほうがよかった、というよきな驚き、本当の喜びに出会った人のように感じるのである。